

天草市富津地区における文化的景観 保全活動の拡がり

田中 尚人¹・岩田 圭佑²・原嶋 香菜子³

¹正会員 熊本大学准教授 政策創造研究教育センター（〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1）
E-mail:naotot@kumamoto-u.ac.jp

²正会員 熊本大学特任助教 政策創造研究教育センター（〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1）
E-mail:iwatake@kumamoto-u.ac.jp

³正会員 熊本県北広域本部菊池地域振興局土木部工務課（〒861-1331 菊池市隈府1272-10）
E-mail:harashima-k@pref.kumamoto.lg.jp

筆者らは、2008年4月以来、天草市河浦町富津（崎津・今富）地区において、文化的景観保全に携わってきた。2011年2月には漁村である崎津地区が国選定重要文化的景観に、2012年9月には崎津地区と密接な関係にある中山間地の農村今富地区が追加選定され、現在世界遺産の構成資産にもなっている同地区であるが、2012年3月をもって閉校となった旧富津小学校に象徴されるように、過疎化・高齢化に悩まされている。本研究の目的は、文化的景観保全に係る価値醸成の過程を可視化し、各ステークホルダーの参加行動について明らかにすることである。このため、筆者らの文化的景観保全に関するアクションリサーチの枠組みを提示し、地域コミュニティの文化的景観保全に関わる場の変遷を整理し、各主体の参加行動を分析し、地域コミュニティ全体での価値醸成について考察する。

Key Words: 景観まちづくり、文化的景観、参加、地域アイデンティティ、アクションリサーチ

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

筆者らの研究室では、2008年4月以来、天草市河浦町富津（崎津・今富）地区において、同地区の文化的景観保全に携わってきた。2011年2月には漁村である崎津地区が「天草市崎津の漁村景観」として国選定重要文化的景観に、2012年9月には崎津地区と密接な関係にある中山間地の農村今富地区が追加選定され、現在「天草市崎津・今富の文化的景観」として世界遺産の構成資産にもなっている同地区であるが、2012年3月をもって閉校となった旧富津小学校に象徴されるように、過疎化・高齢化に悩まされている。

近年、都市計画という行政用語が「まちづくり」に席卷され、市民により身近な環境を含む問題に広がった。この流れは、行政の計画するまちづくりに利害関係のある市民が直接参加していく動きとなった。21世紀に入り、行政の地方分権が市民への分権と理解され、「住民参加のまちづくり」に「住民の自治（地域の自治やコミュニティの運営の問題全体を視野した言葉）」という意味が加わった。そして現在では、「地域の意志」を育てるまちづくりが求められている¹⁾。

土木分野では、地域計画の策定や、街路整備、公園づくり、ダム周辺地利用、水辺整備、道路整備などの現場で住民参加が増えている。住民参加の手法として、ワークショップ（以下、WSと略）が多く行われている。WSとは、あるテーマについて様々な人々がフラットな立場で、技術や知恵を出しあい、グループ作業により計画提案やプロジェクトを運営していく場で、多様な主体の協働の手法である²⁾。WSの利点として、住民がまちづくりへの興味や関心を持つきっかけとなることや、行政と地域住民が協議する体制が取りやすいことなどが挙げられる。しかし、WSが一時的なイベントとして行われたり³⁾、住民参加がその場限りとなってしまうことがあったり、日常のまちづくり活動へ繋がりにくいことが課題として挙げられる。地域づくりの担い手である住民が、日常の生活から地域に関心を持ち、地域活動やまちづくりに参加することは重要であると考えられる。そのため、WSを始めとした住民参加を促す「場づくり」について考える必要がある。

本研究の目的は、文化的景観保全に係る価値醸成の過程を可視化するため、住民参加を促すWSなどの場の成り立ちを整理し、各ステークホルダーの参加行動について分析することである。

(2) 研究の枠組みと手法

まず、筆者らの文化的景観保全に関するアクションリサーチの枠組みを提示し、参与観察によって得られた地域コミュニティの文化的景観保全に関わる場の変遷を整理した。次に、WSを通じた各主体の参加行動を分析し、地域コミュニティ全体での価値醸成⁹⁾について考察した。

具体的には、以下の3点について調査分析を行った。

- ①富津地区におけるこれまでの地域活動を、主体別に分けて整理する。
 - ②各活動について住民参加を視点とした時の「場」としての意義を分析する。
 - ③非日常の活動が住民を主体とした日常の活動へと変わる場づくりの要因を考察する。
- 本研究では、図-1に示すように地域活動に関わる主体を、地域住民、行政、アソシエーションの3主体とする。

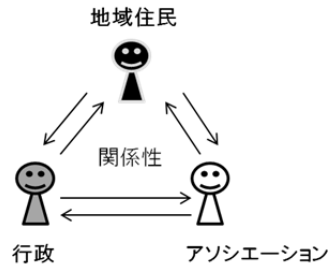


図-1 3主体による場

(3) 住民参加

住民参加は、Community Participationの訳語として導入された言葉である。まちづくりの様々な分野で用いられており、年々キーワードに上げる文献も増加している。政治・行政の分野では辻山⁹⁾が、住民と地方政府の基本的な関係における公共サービスとは、そのサービスを授受する関係者間のセルフヘルプとして機能すべきであり、自治の原点は住民のセルフヘルプにあると述べている。健康教育の分野では宮坂⁶⁾が、基本的には企画、またはプランニングへの参加、端的にはものごとの決定への参加であると述べている。Feingold⁷⁾は、住民参加を次の5段階で整理している⁷⁾。

- 第1段階：知らせる
- 第2段階：相談・協議
- 第3段階：パートナーシップ
- 第4段階：権限の委譲
- 第5段階：市民の自主管理

また、Bichmannら⁸⁾は住民参加の評価指標として、次の5つを視点としている。①ニーズの把握、②リーダーシップ、③組織化、④資源の活用、⑤管理運営。

本研究では、「場」における住民参加の指標として、以下の5段階を考えた。

- 第1段階：情報提供、広報
- 第2段階：双方向の言葉のやり取り
- 第3段階：活動協力、技術提供
- 第4段階：場の進行、権限の委譲
- 第5段階：場の自主管理運営

ここで、「場」のメカニズムとして、主催者側がある目的を持って、参加者の時間と空間を共有するための場

を立ち上げる。参加者は、それぞれの動機や目的を持ちその場に参加する。主催者、参加者それぞれの目的が活動を通じて達成されることで、場の価値が共有される。

2. 研究対象地の概要

(1) 天草市河浦町富津地区

天草市は、2006(平成18)年3月27日、本渡市、牛深市、河浦町など2市9町が合併して誕生し、2012年3月時点で、人口90,561人の市町村である(図-2)。

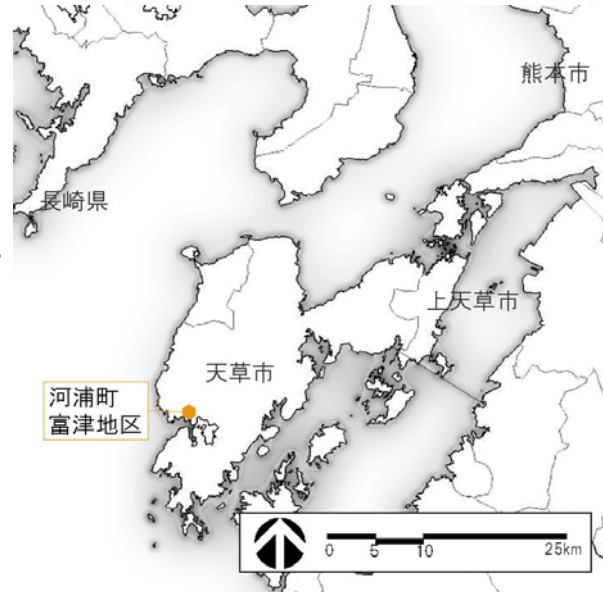


図-2 研究対象地

研究対象地である熊本県天草市河浦町富津地区は、天草下島の南西部、羊角湾の北岸に位置する。面積は20.64km²、人口は952人(2012年)で、農村集落である今富地区と漁村集落である崎津地区、かつて今富の飛び地であった小島地区の計3地区からなる。漁業を主幹産業としているが、就業人口の割合は、第3次産業が半数を占めている。少子高齢化などの影響を受け、天草市では公立学校の統廃合が進み、平成25年度以降、一小一中体制となることから、富津地区唯一の小学校であった富津小学校は、河浦小学校として他の小学校と統合されるため、平成23年度をもって閉校となった。富津小学校の隣にあった富津中学校は、既に2002年(平成14年)をもって閉校となったため、現在富津地区にある教育施設は崎津保育園のみである。

崎津地区は、海の天主堂と呼ばれる崎津天主堂をシンボルとした集落と自然が一体となった景観を有しており、観光客も多く訪れる。1996(平成8)年には、「キリシタンの里崎津」として日本の渚・百選に、「河浦崎津天主堂と海」として日本のかおり風景百選に、そして未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選に選ばれている。

(2) 各地区の特徴

a) 崎津地区について (図-3)

崎津は「カケ」や「トウヤ」と呼ばれる漁師の生活や生業を表した特徴的な構造物を有する漁村である。

カケは、陸地から海に突き出して設置した作業施設である。海中よりシュロを支柱として立て、四方を結束して上に真竹を並べている。船の乗り降りに使用される他、崎津名物の干し物の場としても活躍し、漁具の手入れの場としても機能するなど、崎津の主要産業である漁業に無くてはならないものである。カケが成立した背景には、制約的に、急傾斜地が直接海に突っ込んだかたちの海岸線を有することがあげられる。

トウヤは、軒を並べる家屋と家屋の間にある通路のことである。大通りから1メートル前後の細い路地が、海に向かって通り、民家の通用道やカケへの道として存在している。漁村という地形的にも社会的にも独特な環境下で成立した。漁師はカケや海に行く際にトウヤを通り、漁師以外の人でも漁村の生活の中で重要な情報交換や、交流活動の場としてトウヤが利用されていることも確認できた。調査結果から、漁村の生活の根幹には人々が互いに交流することがあると考えられる。その漁村の生活を営む上で、トウヤが果たしている役割は大きい。

カケとトウヤは崎津という漁村の生活文化をよく反映した居住環境と言え、崎津の地形的制約、漁業という生業に根ざした構造物であり、その利用形態である。

b) 今富地区について (図-4)

崎津の入江の奥に位置する今富では、今富川の支流である2つの小河川が形成する谷地形に集落が形成されており、江戸時代から数次にわたる干拓により拡大された農地において、水田耕作を中心とした生業が営まれてきた。今富からは農産物・林産物が崎津へ搬出される一方、水産物が崎津から今富へもたらされるなど、両集落の密接な関係は現在も維持されている。このように、崎津・今富では、歴史的に流通・往来の拠点であるとともにカケ・トウヤなど独特の土地利用の在り方を示す崎津の漁村景観、及び近世以降の干拓により農地を広げつつ山裾に集落を営んできた今富の農村景観による一体の文化的景観が形成されている。

c) 崎津・今富地区の文化的景観の評価

崎津地区は、崎津天主堂がシンボルとなる漁村集落であり、「カケ」や「トウヤ」と呼ばれる生活・生業を表した景観を特徴としている。平成23年2月に「天草市崎津の漁村景観」として国の重要文化的景観に選定された。一方、今富地区は、山に囲まれた谷合い農村集落を形成し、崎津地区や大江地区と関係を持つ潜伏キリシタンの墓地や信仰の名残を特徴的に残している。生活・生業に関しても崎津地区と繋がりが深く一体的な保全が望まれており、2次追加申請を行った。



図-3 崎津の風景



図-4 今富の風景

(3) 富津地区のまちづくりに関わる主体

富津地区は、2006年11月に長崎県の関係市町が世界遺産の提案書を提出し、2007年1月に国内の世界遺産暫定リストに掲載された。2007年4月に天草市教育委員会文化課に、世界遺産登録推進担当が配置され、世界遺産に向けた取り組みが始まった。富津地区では、この世界遺産登録へ向けた動きをきっかけとして、行政・アソシエーション・地域住民の活動が始まった。

富津地区のまちづくりに関わる各主体と関わりを、地域住民(表-1)・行政(表-2)・アソシエーション(表-3)として整理する。

表-1 地域住民の組織

組織	関わり方
富津地区区長会	通年の地域活動, 住民説明会
富津地区振興会	通年の地域活動
NPOさいのつ	行政との協力, 観光ボランティアガイド
NPO南風屋	南風屋の運営, おもてなし活動

※NPOさいのつ、NPO南風屋(はいや)ともに、NPO団体の申請はしておらず、現在は市民団体としての活動に止まっている。

表-2 行政の組織 (平成24年度末まで)

組織		関わり方
天草市	世界遺産登録推進室(教育委員会)	全般 学術検討委員会、整備管理委員会
	河浦支所	
	財務局	
	企画部	
	建設部	
熊本県	教育庁文化課	学術検討委員会、整備管理委員会
	企画振興部地域・文化振興局文化企画課	
文化庁	文化財部記念物課文化的景観部門	

表-3 アソシエーションの組織

組織	関わり方
東京大学	学術検討委員会
篠原修氏	
熊本県立大学	
蓼茂寿太郎氏	
京都女子大学	
斎藤英俊氏	
東京大学	
五野井隆史氏	整備管理委員会
熊本大学	
安田宗生氏	
熊本大学	
内野明德氏	
熊本大学	
田中尚人氏	
東京大学	調査・研究活動
篠原修氏	
熊本県立大学	
蓼茂寿太郎氏	
熊本大学	グランドビジョン整備事業
田中尚人氏	
熊本大学	調査・研究活動
星野裕司氏	
熊本大学	調査・研究活動
地域風土計画研究室	
エスティ環境設計研究所	グランドビジョン整備事業

(4) 富津地区の文化的景観保全の流れ

2006年からの富津地区における文化的景観保全活動を、年表として表-4にまとめた。長崎県のキリスト教関連遺産が国内の世界遺産暫定リストに掲載されたことにより、市長主導で世界遺産登録に向けて動き出し、天草市役所に世界遺産登録推進担当が配置された。富津地区の活動は、担当が配置された天草市教育委員会が主体となってスタートした。担当が配置されてから2009年6月までの間に、行政から地域住民へ世界遺産登録に向けた説明会が開催された。また2007年7月に地域での文化的景観の価値を検討するための文化的景観学術検討委員会が設置され、重要文化的景観選定へ本格的に動き出した。これをきっかけとして、世界遺産登録の前に、まず国の重要文化的景観選定に向けて取り組むことにシフトした。2008年4月には地域住民の意識の盛り上げるため「崎津・今富地区の世界遺産登録を目指す会」が発足し、行政と地域住民の協力体制が取られ始めた。2011年1月には、持続的な文化的景観の保全へ向けたランドデザインワークショップが開始した。

また、2008年8月には、景観構成要素の把握や、地域住民との文化的景観の価値共有を目的としたまち歩きWS「わたしのまちの〇と×」が行われ、2011年からは、地域住民の文化的景観選定への意識の盛り上がりと今富地区の2次選定により崎津地区と一体となって富津地区としての活動へ意識を向けること、富津小学校の閉校による地域コミュニティの衰退への危惧から、熊本大学が積極的に関わるようになり活動が行われた。

3. 文化的景観保全に係る場の考察

(1) 考察の視点

富津地区において実施されてきた、地域活動及び文化的景観保全に係る活動を整理し、場のメカニズムを考慮しながら、①各ステークホルダーがどのような目的や動機により参加し、②その「場」でどのような活動を通して、③主催者側と参加者側、参加者同士でどのように価値を共有したのか分析した。その一連の流れの場を、住民参加の観点から可視化した。

①をアンケート調査、②をヒアリング調査、③をアンケートとWSで得られた成果物(図-5)を分析し考察する。活動を整理するにあたり、教育委員会文化課の文化的景観担当行政職員2名にヒアリング調査を行った。また、活動を行っているNPOさいのつ代表者兼富津地区区長連合会会長、NPOさいのつ前代表、NPO南風屋関係者ら文化的景観保全やその他のまちづくり活動に熱心に取り組んできた地域住民についてもヒアリング調査を行い、さらに地域住民に対して2012年11月から2012

表-4 富津地区における文化的景観保全活動年表

年	月	事項
2006年	1月	「近江八幡の水郷」選定、景観法及び文化的景観説明会
	7月	全国文化的景観地区連絡協議会 発足
	11月	長崎県・関係市町が世界遺産の提案書を提出
2007年	1月	国内の世界遺産暫定リストに掲載
	4月	文化課に世界遺産登録推進担当配置
	6月	崎津地区住民説明会
	7月	第1回 文化的景観学術検討会
	9月	世界遺産登録推進シンポジウム 第2回 文化的景観学術検討会
2008年	10月	文化課に世界遺産登録推進室設置
	2月	富津地区7区、大江地区8地区説明会
	3月	第3回 文化的景観学術検討会
	4月	熊本県教育庁文化課内に「世界遺産登録推進班」設置。 「崎津・今富地区の世界遺産登録を目指す会」発足
	7月	河浦支所、天草支所職員説明会 富津地区(崎津・今富)地域づくり説明会
	8月	第4回 文化的景観学術検討会 崎津まち歩きワークショップ
2009年	1月	第5回 文化的景観学術検討会
	3月	第6回 文化的景観学術検討会
	8月	第7回 文化的景観学術検討会
	11月	「歴史まちづくり法」施行、里地里山保全・活用検討会議
	12月	「カケ」の所有者説明会および崎津地区「街区」の景観構成要素指定同意取得
2010年	1月	崎津地区「街区」の景観構成要素指定同意取得 第8回 文化的景観学術検討会
	3月	崎津地区文化的景観シンポジウム
	6月	崎津地区景観協定運営委員会 H23年度第1回(第9回) 文化的景観学術検討会
	7月	第1次選定申出
	9月	文化的景観に係る関係各課長会議
	10月	第1回 文化的景観整備管理委員会
	11月	答申
2011年	1月	崎津ランドデザインワークショップ 第1次選定(崎津地区)
	2月	第2回 文化的景観整備管理委員会 H23年度第2回(第10回) 文化的景観学術検討会
	3月	崎津カケ復元竣工 NPOさいのつ
	5月	今富まち歩きワークショップ 天草市文化的景観整備管理委員会による現地調査
	8月	崎津まち歩きワークショップ
	10月	母校を考えるワークショップ①
	11月	母校を考えるワークショップ②
	12月	地域学習授業：富津校区の〇を見つめる、育む
	1月	富津小学校閉校記念式典 H23年度第2回(第11回) 文化的景観学術検討会
	3月	第2次選定申出 富津小学校閉校
2012年	6月	「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産入り
	8月	H24年度第1回 文化的景観整備管理委員会
	9月	第2次選定(今富地区) 「とみつ夏の学校」富津ラボ活動開始
	10月	全国文化的景観地区連絡協議会 第32回風景デザインサロン
	11月	「とみつ秋・冬の学校」開催 H24年度第2回 文化的景観整備管理委員会
	12月	H24年度第1回(第12回) 文化的景観学術検討会
2013年	1月	H24年度第3回 文化的景観整備管理委員会
	2月	

年1月にかけて、これまで同地区で開催されたWSに関するアンケートを実施した。



図-5 富津の〇と×の風景

日時	2007年4月～	
活動名	日常の活動	文化伝承活動
参加対象	地域住民, 観光客	地域住民
内容	杉ようかんの販売	伝統料理, 方言教室
関わり		



図-6 NPO南風の間づくり

日時	2009年11月～	2011年3月	2012年9月
活動名	日常の活動	カケの復元	ボランティアガイド講座
参加対象	地域住民, 観光客	地域住民, 観光客	地域住民(さいのつ)
内容	観光ボランティアガイド, よらんか	旧岩下家のカケ復元	崎津の歴史, ガイド講座
関わり			

図-7 NPOさいのつの間づくり

(2) 地域住民主体の間

a) NPO南風屋 (図-6)

NPO南風屋では、杉ようかんの天草謹製認定において行政との協力を行っているものの、南風屋の運営や土産品の販売、文化伝承活動など地域住民自身で行っている。これは、第5段階の参加といえる。杉ようかんの販売に着目すると、NPO南風屋が地元文化の継承を目的に販売し、地域住民を中心に消費されている。この販売自体が、生活文化を地域住民に広げるといったNPO南風屋の活動目的を果たしており、生業を中心にした住民参加の場が形成されている。また活動場所である南風屋が、活動メンバーの団らんの場、食事の場となっており、外に置かれたベンチが地域住民の休憩所になっている。日常の要素である食事や休憩によって地域住民の関わりが見られ、他の地域住民が関わりやすい雰囲気であることも住民参加を促していると考えられる。

b) NPOさいのつ (図-7)

NPOさいのつは、前身の「崎津・今富の世界遺産登録を目指す会」から、行政の提案により設立された。活動拠点としている「よらんかな」は、旧岩下家として改装される前に、前代表がカケの復元を目的として行政に提案を行い、行政の協力を受けて造られた(第3段階)。そのため、行政の管理のもと、地域住民が運営を行っており、第4段階、第5段階の参加が行われている。また、ボランティアガイドについては、行政から富津の歴史や

ガイドを行う際の心構えをレクチャーした。またその後実際にまちを歩いて体験を行った。この活動によってガイドをできる人間が増えた。この活動では、NPOさいのつの中で主催者と参加者に分かれている。

(3) 行政の活動

a) 説明会, シンポジウム (図-8)

地区住民説明会や文化景観説明会は、地域住民への景観の意識付け、地域を保全するための文化的景観への理解を目的として行政が主催した。参加者である地域住民は、世界遺産や地域の事を知りたい、理解したい、また自分の意見を言いたいといった目的を持って参加した。アンケートの結果から参加者の感想を見ると、文化的景観としての価値、地域住民の意識の高揚、地域の歴史といった意見が挙げられており、主催者側の目的が参加者側に共有されていることが分かる。また、漁村景観として保全するために必要なことを学習することができたという感想も見られ、参加者の目的が活動を通して共有されたことが見られる。

双方の目的が共有された理由として、行政と地域住民の協力体制にあると考える。あらかじめ行政担当者から地域住民の代表(区長)に協力を要請し、区長から他の地域住民への説明を頼むことで、文化的景観や世界遺産への理解を得やすい形にしている。地域づくり説明会やシンポジウムでは行政だけでなくアソシエーションとの

日時	2007年6月～2008年7月		
活動名	地区住民説明会 文化的景観説明会	地域づくり説明会	世界遺産登録推進シンポジウム 崎津地区文化的景観シンポジウム
参加者	地域住民	地域住民	地域住民
内容	行政から住民への説明	行政から住民への説明	行政、専門家から住民への説明
関わり			

図-8 行政の場づくり (説明会・シンポジウム)

日時	2007年7月～	2010年10月～	日時	2011年1月～2011年3月
活動名	文化的景観学術検討会	文化的景観整備管理委員会	参加者	地域住民(地区振興会)
参加対象	行政, アソシエーション, 地域住民		内容	ワークショップ, 発表会
内容	協議		関わり	

図-9 行政の場づくり (委員会)

図-10 グランドデザインの場づくり

関わりが見られる。これらの活動で、地域住民は広報を受け、活動に参加し、質疑応答を通して意見のやり取りを行うという参加の第1・第2段階を踏んでいる。そして区長など地域の代表者は地域の事を学ぶ地域住民としての立場と共に、行政との協力体制により地域住民への理解を促す第3段階の参加に達していると考えられる。

b) 学術検討委員会・整備管理委員会 (図-9)

行政と専門家であるアソシエーションの協働により行われる文化的景観学術検討会、文化的景観整備管理委員会では、地域住民の代表(区長)もこの場に参加する。これらの委員会の場には、事前に地域住民が行政への調査協力を行っている。また、文化的景観整備管理委員会は、公共整備事業に対する地域住民を交えた協議の場となっており、第2段階の参加を実践している。地域住民一般の広い参加を行っているものではないが、区長が地域住民の総意としての発言を行い、それが公共空間づくりに活かされているので第3段階の参加を行っていると考えられる。

(4) アソシエーションの場づくり

a) 崎津のグランドデザインWS (図-10)

崎津のグランドデザインWSでは、四つの目標にまとめ、それぞれの目標に向けて取り組んでいく事例を考えることがとても勉強になったという意見が見られ、WS

の目的である崎津のグランドデザイン事業が活動によって地域住民に理解されている。また、地域の思いを知ることができたという意見があり、崎津のまちの魅力や課題、将来像をみんなで話し合うという主催者側の目的が共有されていることが分かる。この共有については、ファシリテーターが、参加者に対して事前に説明を行い理解を促したこと、またWSという形式が大きく働いたと考える。主体側の用意するテーマに対して地域住民が意見を出しまとめるという活動が行われて、第2段階の参加になっている。このWSの参加者として、地域振興に携わっている役員を中心に広報が行われたため、他の住民には第1段階の参加も行われていない。しかし、活動の成果報告を「崎津まちづくりニュース」として全戸配布しており、活動に直接参加していない人との共有を行っているため、第1段階の参加に近い状況が作られていると考えられる。

b) わたしのまちの〇と× (図-11)

まち歩きイベント「わたしのまちの〇と×」では参加者が一緒にまちを歩き、地域住民の意見をまとめる。感想として、「普段日常生活で気がつかないことでも他地区にない良いこともあると改めて感じることもあった」という意見が見られた。日常の何気ない風景に地域の良さを見つけてほしいという活動の目的が共有されていることが分かる。地域住民は第2段階の参加を行っている。

日時	2009年8月	2011年5月	2011年8月
活動名	崎津のまちの〇と×	今富のまちの〇と×	かえってきた！崎津のまちの〇と×
参加者	住民(子供中心)	住民(子供中心)	住民(子供中心)
内容	まちあるき、マップ作り	まちあるき、壁新聞づくり	まちあるき、壁新聞づくり
関わり			

図-11 わたしのまちの〇と×の場づくり

日時	2011年10月	2011年11月	2012年9月
活動名	第1回 母校を考えるワークショップ	第2回 母校を考えるワークショップ	富津ラボ
参加者	住民(大人)	住民(大人中心)	地域住民
内容	意見をまとめる	〇と×の報告、提案、意見をまとめる	WS、〇と×、太鼓練習
関わり			

図-12 母校を考えるWS・富津ラボの場づくり

また、地域の小学生を中心に参加を呼び掛けることで、子どもの親の世代の参加も促している。2011年の今富のまちの〇と×、崎津のまちの〇と×では、2回目ということもあり、まち歩きだけでなく、縄跳び体験や地元料理教室、漁船クルーズを企画し、プログラムに取り入れた。地域住民との協力や技術提供を受けており、第3段階の参加が行われていると言える。またこの活動では、子どもが大人とは違った目線で地域を見て意見を出し、大人に共有される。そして縄跳びや料理などの技術を持った地域住民がプログラムを通して自分の技術を生かしており、地域住民の属性を生かした住民参加が行われる「場」になっている。

c) 母校を考えるWS、富津ラボの活動(図-12)

母校を考えるWSにおいても、地域住民の意見を聞くという点で〇と×と同様に第2段階の参加が行われている。富津ラボにおいては、活動として、WS、まち歩き、太鼓練習などを行っている。太鼓の練習については、河浦小学校の協力、旧富津小学校教頭先生の参加により指導を行った。また参加児童の親の協力も得られ、第3・第4段階の参加を得られている。また、富津ラボにおけるWSの中で、数人の参加者でも色々な考えがあることが分かった、住民全員の考えも聞きだせば何かみえてくるのでは、という意見が見られ、参加者である地域住民同士で考えが共有される「場」がWSを通じて作られたことが分かる。

富津ラボに関しては、第2回母校を考えるWSで大学生の研修施設や研究室の天草移転によって若い人と地域をにぎやかにという意見が出たこともきっかけとなって、天草市と熊本大学が協力して作られた。WSの「場」が別の「場」を作るきっかけとなっており、「場」の連鎖を見ることができる

4. まとめ

本研究では、住民参加を促す場づくりについて、天草富津地区における文化的景観保全活動を対象として考察し、今後の持続可能なまちづくり活動へ生かすことを目的とした。そのために、富津地区においては近年、単に文化的景観保全に関する直接的な住民活動のみならず、持続可能なまちづくり活動一般を対象として、これらの場への参加を主体別に整理し、約7年に渡る地域全体での場の成り立ちについて考察した。

研究の成果を以下に示す。

①富津地区における活動は、世界遺産登録へ向けた動きがきっかけとなって起こった。文化的景観保全に関する行政から地域住民への説明や、地域住民の景観保全への意識付け、持続可能な地域形成を目的とする活動の中で、行政、地域住民、アソシエーション間で様々な場において価値共有が見られ、地域の合意が醸成された。

②住民の参加については、外発的動機が参加に大きく影響していることが分かった。活動の中で、新しく地域について学ぶ場となっていること、WS形式が参加者同士の考えを知り共有する場となっていることが、参加者の印象に残りやすいことが分かった。

③「場」として分析する際、地域住民、行政、アソシエーションの各主体を、「主催者／参加者／ファシリテーター」の役割を考えて関係性を把握することで、参加による場づくりが理解しやすくなった。また「場」を、各主体の持つ「目的」、「活動」、「共有内容」に着目してヒアリングやアンケートを分析することで、非日常の場づくりが日常の場づくりへと発展する要素を含んでいることが分かった。

今回は、ワークショップを中心として、地域活動に関するヒアリングやアンケート、そして筆者らの研究室による参与観察のデータに基づいて、文化的景観保全活動が、いかに地域のまちづくり活動そのものと関わり合っているのか、が理解された。ただし、文化的景観保全活動は、まだまだ非日常の地域活動であるので、今後の課題としては、同地区における日常の地域活動についても場として分析すること、「場」同士の連鎖による地域の変化について分析を行うことが必要だと考える。

謝辞：

本研究に関して、たくさんの方々のご協力を頂いた。平田豊弘氏、中村大介氏をはじめ天草市教育委員会文化

課世界遺産登録推進室のみなさまには、各種資料の提供、研究の場づくりに関してもご協力頂いた。森田哲夫さん、幸川壽之さん、船津智恵子さん等、富津地区の地域住民の方々には、日頃から調査・研究にご協力頂くだけでなく、地域として私どもの研究室を温かく迎え入れて頂いた。徳永哲代表以下、(株) エスティ環境設計研究所の所員の皆様にも、たいへんお世話になりました。ここに記して、感謝申し上げます。

参考文献：

- 1) 伊藤雅春, 大久手計画工房：参加するまちづくりーワークショップがわかる本, OM出版, pp.13-14, 2003
- 2) 三船康道 他, まちづくりコラボレーション：まちづくりキーワード事典 第三版, 学芸出版社, p.280, 2009
- 3) 前掲書 2), p.274
- 4) 杉万俊夫編著：コミュニティのグループ・ダイナミクス, 京都大学学術出版会, 2006
- 5) 杉山幸宣：住民参加・住民主体の意味, 保健婦雑誌, pp.1075-1080, 1993
- 6) 宮坂忠夫編：地域保健と住民参加, 東京第一出版, 1983(星旦二, 福永一郎, 櫻井尚子, 福本久美子, 古川文隆：あなたのまちの健康づくり, 東京新規格出版社, 2001)
- 7) 厚生省, 健康・体力づくり事業財団：地域における健康日本21実践の手引き, 2000
- 8) 櫻井尚子, 巴山玉蓮, 渡部月子, 藤原佳典, 星旦二：ヘルス・プロモーションにおける住民参加とエンパワーメント, 日衛誌, 第57巻2号, p492, 2002

(2013.5.7 受付)